

社会福祉人物史研究方法論の動向と展望
— 社会福祉従事者論の視点を中心に —

佐藤 昭洋

東北公益文科大学総合研究論集第37号 抜刷

2020年1月20日発行

研究ノート

社会福祉人物史研究方法論の動向と展望 — 社会福祉従事者論の視点を中心に —

佐藤 昭洋

研究背景

社会福祉学という学問の領域では、研究方法論はどのような位置づけにあるのだろうか。大友昌子は、「社会福祉学、教育学、法律学などは、それぞれの社会事象を領域別に切り取って焦点化し、実践性、実用性の受容から形成されてきた学術です。これらの実践性や実用性を目的とした学術は独自の対象、視点、そして解くべき課題をもっていますが、歴史学、社会学、経済学などのような固有の研究方法論は持っていないことに特徴がある¹」と述べており、社会福祉学固有の研究方法論の未確立について言及している。

また大友は、社会福祉学において歴史研究が欠かせない背景について、「(1) 歴史研究の方法論と社会福祉学」のなかで次のように述べている。「歴史研究が社会福祉学という学術へのアプローチ方法として有効であることはいうまでもありません。「社会福祉という社会事象がどのような経緯をたどって今日のように形成されてきたのか」というテーマを時間軸に沿って明らかにするというのが、社会福祉学の歴史研究の一般命題です。学際科学である社会福祉学には、学術のアイデンティティーを求めるうえでも歴史研究は欠かすことができない²」とし、社会福祉学という学問領域のアイデンティティーの確立への寄与という意味でも社会福祉の歴史研究の意義がある。

社会福祉学領域における歴史研究の分類の一つとして、人物史研究が存在する。大友は、日本における社会福祉の歴史研究の分類として、「1. 社会福祉の全体史・総合史（国内・国外の一国単位の歴史）」、「2. 社会福祉の地域史（東北、東京、山口などの地域単位でとりあげる）」、「3. 社会福祉の思想を系統的に明らかにする方法、社会福祉の思想史」、「4. 個別および複数の社会福

¹ 大友昌子（2013）「歴史研究という方法論—社会福祉研究におけるその有効性と可能性—」（特6.6. 集：社会福祉研究の軌跡）『社会福祉』第54号、日本女子大学、67頁。

² 同上、70頁。

社施設の歴史をとりあげる方法、施設史]、「5. 社会福祉をめぐる個別の人物に焦点をあてる方法、人物史]、「6. 社会福祉に関わる個別の制度・政策、分野をとりあげる方法、生活保護制度の歴史、保育の歴史など]、「7. 社会福祉に関わる個別の社会事象をとりあげる方法、貧困史]、「8. 社会福祉活動の歴史を実践史という切り口で分析する方法、実践]、「9. 社会福祉の歴史的諸事象を文化史としてとらえる方法]、「10. 社会福祉をめぐる東アジアの交流史などのエリア研究]、「11. その他」の11種類に区分した。そのうち、人物史研究は、「社会福祉をめぐる個別の人物に焦点をあてる方法」として定義されている。だが、先の大友が述べているように、社会福祉学に固有の研究方法論が確立されていないということは、社会福祉における人物史においてもまた研究方法論は未確立であることになる。

とはいえ、研究方法論が確立されることにより、従来取り組まれてきた日本における社会福祉学領域の人物史研究の具体的な視点や方法、枠組みについての体系的整理がなされ、人物史研究の指標の明確化、ひいては社会福祉学領域の研究方法論の確立への一助になりうるであろう。

研究目的

以上の点から、本稿では、日本における従来の社会福祉人物史研究の視点や方法を整理すること、また社会福祉人物史研究の今後の展望について整理検討することを研究の目的とする。

特に、社会福祉人物史研究の視点や方法として、社会福祉従事者論の立場から、どのような人物を対象とするか、また対象となった人物の何を対象とするかといった、人物の外的と内的な部分に区分しての人物史研究の視点や方法を整理する。さらに、社会福祉人物史研究の今後の展望として、社会福祉従事者における対象論について検討する。

研究方法

本研究の方法は、文献研究を主とする。文献の種類とは、主に従来の社会福祉人物史について記された著書や学術論文、学会誌の巻頭言などを対象とした。本稿の構成としては、まず社会福祉人物史研究方法に関する研究枠組みにつ

いてその概要を整理した。特に、従来の社会福祉人物史研究における意義や目的、人物史の対象（分野）を中心にまとめた。対象（分野）については、①社会福祉（社会事業）従事者呼称の変遷、②社会福祉（社会事業）従事者の担い手、③有名と無名の社会福祉（社会事業）人物、④社会福祉人物史の「御墨付」、⑤社会福祉（社会事業）従事者としての女性、⑥社会福祉人物史の地域、⑦個人の何を分析対象とするか、などの分析項目を設定した。

次に、社会福祉人物史研究に活用できる史資料について整理した。歴史研究における史資料の種類としては、一次史料と二次資料に区分されるが、社会福祉の歴史研究については社会福祉人物史においても活用される一次史料と二次資料が存在する。その際に活用が期待される史資料の種類について整理した。

そして、社会福祉人物史研究の視点に関する議論についても、これまで複数の視点から人物史が研究されている。複数の視点としたのは、先の大友が分類した社会福祉の歴史研究の種類において、人物史研究以外からの歴史研究にも見られたからである。そこで本稿では、社会福祉従事者論からの視点を軸とし、人物史研究の視点についての議論を整理した。

最後に、社会福祉人物史研究の今後の展望として、社会福祉従事者における新たな対象論の発展的側面について、晩年の田代国次郎の専門職人物史研究構想を参考に考察をまとめた。

倫理的配慮

本稿では、これまでの先行研究に敬意を払うとともに、盗作もしくは剽窃の疑いをもたれぬよう、自説と先行業績とを峻別する記述に努めた。

1. 社会福祉人物史研究における研究枠組みの概要

(1) 社会福祉人物史研究の目的

社会福祉人物史研究における目的を考えるにあたっての依拠としては、1971年に出版された『人物でつづる近代社会事業』がその一つに当たる。

本書のはしがきには、社会福祉の前身の社会事業と呼ばれる時代からの従事者論についての課題が提示されている。「外形的には社会事業は急速に整備されているが、社会事業のもつ内在的課題である従事者論があまりすすまず、た

だ「専門家」という抽象的規定が、超歴史的に論じられているだけである。われわれがここで日本社会事業をきずいた人びとの足跡を再検討しようとするのも、このような欠陥を多少でも埋めたいと思うからである」³とし、社会事業の制度政策面、運営面についての整備は進んでいるものの、実際に現場で働いている労働者、従事者についての課題が当時から存在していたことを示している。

そこで、社会福祉（社会事業）の先駆者にあたる人々に焦点を当てて、「この人達の思想や社会事業の方法はそれぞれ立場の相違はあるが、すぐれたものであったことは周知のところである。しかしその多くは谷底のない聳えたつ高峯みたいなものである。そこには日本人の特性であるすどい「体験」や「感性」にもとづいた処遇方法などが見事に開花している」⁴とし、「我々はそれらの方法なり思想なりを現在の場で問いなおし、日本社会事業の遺産として整理してみたいと思う。そしてそれが将来創造さるべき日本社会事業の従事者像の何等かの刺激のひとつになればと考えたからである」⁵と人物史研究を遂行する目的について述べられている。つまり、これまでの社会福祉の先駆者の実践や思想はまるで職人芸のように築かれてきた質の高いものであったものの、誰にも真似できるようなものではなく、それらの実践や思想が次の世代に受け継がれるという部分が疎かになっていたという課題も一方で存在していた。したがって、「その多くは不連続のままで、現在の若い従事者と断絶状態にあるといつてよい」⁶と、社会福祉従事者像の世代間継承ないし、歴史的連続性を持たせるための人物史研究を探ろうとしたのであった。

（2）社会福祉人物史研究の意義

では、社会福祉人物史を研究する意義とは何であろうか。『人物でつづる近代社会事業』のなかに、吉田久一、柴田善守、小倉襄二、一番ヶ瀬康子らこれまでの社会福祉の歴史研究や人物史研究の著名な研究者による座談会の会話が掲載されている。この会話を辿ることで、これまでの社会事業ないし社会福祉

³ 吉田久一・一番ヶ瀬康子・小倉襄二・柴田善守（1971）『人物でつづる近代社会事業の歩み』、全国社会福祉協議会、はしがきIV頁。

⁴ 同上、はしがきIV頁。

⁵ 同上、はしがきIV頁。

⁶ 同上、はしがきIV頁。

に欠けていた部分を補う意味での意義が語られている。

吉田は、研究対象とする人物を通して、社会福祉従事者像をいかに創造していくかといった点について語っている。「まず第一に、なぜ人物をとりあげたかという問題ですが、私たちとしては、人間をとりあげることによって、社会事業のいままでの欠けたところを補っていかねばならないことだったと思います」⁷と発言し、続けて「この人物を通して、どういう社会事業従事者像をつくるか（あるいはあるべきか）問いなおしてみようということがねらわれた」⁸とあることから、ここに一つ社会福祉人物史研究と社会福祉従事者論の課題の関係性を発見することができる。

柴田は、従事者像と民間社会事業の姿について、その開拓者たちの役割や軌跡から教訓や論理を汲み取ることにについても言及している。「たとえば、従事者像であるとか、民間社会事業のあるべき姿とかということが、問われていますね。そういったものの立脚点、論理をどこに求めるかという、現状論からでもでてくるけれども、もう一步深めて、日本の社会事業史の発展のなかであらわれた開拓者の役割や、それらがえがいた軌跡のなかに、教訓なり論理なり方向を求めることも重要」⁹とあることから、従事者像と民間社会事業への立脚点や論理を人物史研究から発見しようとした。

一方、小倉は対象人物の一部分に注目するのではなく、時代背景や他者とのかわりから見えてくる人物史研究の方法論について言及している。「方法論の問題として、人物のある頂点だけを通るんじゃなくて、できるだけ時代の段階と、全て個性をもった人間との出会い、かわり方をどこかでおさえようといった気持ちがあったと思う」¹⁰とあることから、その人物が生きた時代からの影響、人間と人間の出会いから生れるかわりは、人物の個別性のみを分析するだけに限らない点について発言している。

さらに一番ヶ瀬は、社会福祉従事者の対象について施設や運動の創始者だけに注目せず、彼等を支えてきた人々へのアプローチという観点について言及し

⁷ 吉田久一・一番ヶ瀬康子・小倉襄二・柴田善守（1971）『人物でつづる近代社会事業の歩み』、全国社会福祉協議会、227頁。

⁸ 同上、228頁。

⁹ 同上、227頁。

¹⁰ 同上、229頁。

ている。「いわば無名の社会事業従事者の「人間」群像へのアプローチを考えていかなければならないと思うんです。石井十次にしても山室軍平にしても、彼とともに、あるいは彼をささえてやってきた人びとがいる。いたからこそできたのであって、その人びととの人間関係もふまえての考察、また有名ではない施設や運動の創始者の「人間」、さらに現場に何十年もねばっている人びとの「人間」群像、されには挫折していった人びと、その歴史における位置づけなどを志向する」¹¹ことの重要性を説いた。一番ヶ瀬は、有名な人物を裏で支えてきた人々や現場で日夜実践に向きあい働き続ける人々、あるいはその途中で挫折していった人びとを「無名」という対照的用語を用いて、社会福祉分野で活躍してきた「人間」という立場から人物史研究の対象論の拡大について論究した。

このような社会福祉人物史研究の目的と意義のように、社会福祉従事者論の発展という意義から、人物史の研究方法論についてはその人物個人の分析に終始せず、時代背景や他者との関わりあいを通じて見えてくる人物像という、人物史研究の対象範囲に人物史研究発展の鍵の一つがあるのではないだろうか。

(3) 対象（分野）

先に一番ヶ瀬も言及しているように、その区分が正しいか否かは別として、有名と無名の人物としての社会福祉従事者像が存在することもまた確かである。田代国次郎は社会福祉人物史研究においてこの有名と無名の定義について言及している。ここでは、主に2000年代の晩年の田代国次郎の人物史研究方法論と社会福祉従事者論について整理する。

①「社会福祉（社会事業）従事者」呼称の変遷

現代において、社会福祉分野の従事者には国家資格制度が設けられ、国家資格を取得することで「社会福祉士」や「精神保健福祉士」などと呼称されている。だが、これはおよそ昭和の終わりから現代までの30年余りのことであり、従事者呼称の変遷についてはこれまで様々な名称で社会福祉従事者は呼ばれて

¹¹ 吉田久一・一番ヶ瀬康子・小倉襄二・柴田善守（1971）『人物でつづる近代社会事業の歩み』、全国社会福祉協議会、229頁。

きた。田代は、社会福祉（社会事業）従事者の呼称の変遷と時期区分について、以下のように整理している。¹²

1868年～1920年頃の明治初期から大正中期にかけては、当時社会福祉は慈善事業と呼ばれ、その従事者は「慈善家や慈善事業家、細民救済家、感化救済家、感化救済事業家」などと呼称された。それから、1921年～1945年頃の大正中期から昭和初期、昭和戦前期にかけては、慈善事業から社会事業、厚生事業とその呼び名を変えた。従事者もまた、「社会事業家、社会事業功労者、厚生事業家」などと呼ばれた。

1945年以降の戦後期にかけてもしばらくは、厚生事業から再び社会事業に戻り、従事者も「社会事業従事者、社会事業家」と呼ばれたのであった。だが戦後、社会福祉に関する法律や制度、システム、処遇技術等が発展するにつれ、遂に社会福祉と呼ばれる時代になった。また、海外からの影響を受け「ソーシャルワーカー」というカタカナ用語としての社会福祉従事者の呼称が誕生した。ソーシャルワーカーは現代においても、社会福祉士や精神保健福祉士等の国家資格を必ずしも所持せずとも、ソーシャルワークの業務に従事しているものはソーシャルワーカーとして認識されている。

社会福祉従事者の呼称の変遷は、その時代の社会福祉の呼称とともに、また海外からの影響もあり、社会福祉の歴史の反映としてその名称も変わってきたのであった。

②社会福祉（社会事業）従事者の担い手

田代は、社会福祉（社会事業）従事者の担い手について、どのような所属の人物が従事してきたかについてまとめている。それは、「ある福祉分野の施設創始者であったり、民間人で宗教的分野の有名人であったり、ある知識の有力者、篤志家、医者、実業家等々から始まる人物が対象となることが多かった」¹³とし、「また、戦前の時期は、専門の社会事業教育、研究が不十分であり、多くが専門職教育、訓練等を受けた人物だけが、社会事業の仕事をしていただけ

¹² 田代国次郎（2009）『近現代社会福祉人物小史』、社会福祉研究センター、3頁。

¹³ 同上、3頁。

ではない」¹⁴人物が社会福祉（社会事業）を担ってきたのであった。これは、主に明治期から大正、昭和戦前期にかけて慈善事業や社会事業と呼ばれた時代に、事業を開始した人物の所属であった。宗教や医療分野から社会福祉（社会事業）へと繋がっていった人物もおれば、金銭的な余裕があったもの、その地域の有力者やある一定の権力を持っていた人物が事業を始めるといった場合もあった。

だが、いずれにしても当時は社会福祉（社会事業）を養成する学校や教育システムなどの全国的な確立がなかったため、専門的な社会福祉教育を受けた人物が担う場合は少なかった。

③有名と無名の社会福祉（社会事業）人物

このように多様な担い手が社会福祉（社会事業）に従事してきた中で、先の一番ヶ瀬が指摘したような「無名」の人物について、田代もまた幅広く言及している。「そこで従来までの、そうした一握りの有名人、国及び行政から表彰されたような有力者社会事業人物史だけでなく、いわば国及び行政から表彰されない無名の社会事業人物をいかに多く発掘し、民衆の「いのち」を支えた人物として記録するかである」¹⁵とし、田代にとっての有名と無名の社会福祉従事者の観点は、国及び行政から表彰を受けてきたかどうか、という基準が1つにあり、田代は有名な有力者の社会事業人物史だけではなく、無名の社会事業人物の今後の発掘に期待を寄せている。

④社会福祉人物史の「御墨付」

さらに、田代は有名人的な社会福祉人物が、なぜ有名と位置付けられるかという点について、「御墨付」という用語を用いて言及している。「これまでには、ある時代の部分的であったり、行政権力側からの「御墨付」と見られる社会福祉界の有力者、施設創立者、その業界の実力者、行政権力支配者等々を中心とした社会事業人物、社会福祉人物等が圧倒的に多く、かなりの文献が出版されている」¹⁶と有名人物が有名と位置付けられている背景には、行政権力側から

¹⁴ 田代国次郎（2009）『近現代社会福祉人物小史』、社会福祉研究センター、3頁。

¹⁵ 同上、42頁。

¹⁶ 同上、47頁。

の「御墨付」があると見ている。

一方で、無名は人物については、「ところが、よく考えてみると、そうした資本の側、体制側、行政権力者側からの「御墨付」がもらえない、表彰されないような人物は、そうした世間に出まわっている近現代社会福祉人物の文献には登場してこないことが多い¹⁷とし、行政権力側からの「御墨付」がもらえないことで、従来の社会福祉人物史には登場してこない人物もいたということであった。

「御墨付」とは、そもそも江戸時代に幕府や大名から証明のために家来に与えた、黒印の押しあてられた文書のことを指し、比喩的に、権威者からもらった保証として意味合いで使われる。従来の社会福祉人物史の取り挙げ基準には、このような権威者からのなんらかの保証があるかないかで決まっていたと認識する説もあった。

⑤社会福祉（社会事業）従事者としての「女性」

社会福祉（社会事業）に従事してきた人物は、必ずしも男性のみではない。たとえば、施設経営におけるこれまでの夫婦の役割を「車の両輪の関係」と捉え、「男性が資金集めに奔走すれば、それを内部から施設本来の仕事である処遇方面等を固めてくれたのが女性にほかならない。」¹⁸といった女性の役割も大きかったといえる。そして、これまでの社会事業に関わってきた女性のみを叙述した、初めての社会福祉人物史研究の著書として、1988年に五味百合子らにより出版された『社会事業に生きた女性たち』がある。本書は、社会福祉人物史研究の対象を性別の観点からも取りあげることが可能にした。

⑥社会福祉人物史の地域

田代は、社会福祉人物史研究の対象として取りあげられてきた人物の活動地域についても言及している。「これまでの社会福祉人物史研究では、東京、大阪などの大都市部を中心とした有名人に限定されてきた」¹⁹とし、大都市部偏

¹⁷ 田代国次郎（2009）『近現代社会福祉人物小史』、社会福祉研究センター、47頁。

¹⁸ 五味百合子（1988）『社会事業に生きた女性たち』、ドメス出版、297頁。

¹⁹ 田代国次郎（2009）『近現代社会福祉人物小史』、社会福祉研究センター、3頁。

重の人物史研究に批判的な姿勢を示している。

⑦個人の「何を」対象とするか

ここまでは、社会福祉人物史の対象においても所属や性別など外面的な分析対象について整理してきた。次に、対象となる人物の内面的な分析対象について検討する。

田代は、2009年に出版した『近現代社会福祉人物小史』のなかで、対象人物の内面的な分析対象として、「人物ひとりひとりの社会福祉思想、理論、支援方法、教育、宗教、生活史、仕事分野、地方別、政治的思想、政策認識、経験年数、性別、社会的背景等々が背後にある」と掲げているが、合せて「その吟味、因果関係等々を検討するとなれば、そう安易に人物史が出来るものではない」とも記述しており、人物の内面的な分析対象の範囲の目標と現実的な困難性について考えが見られた。確かに、上記に挙げた項目のすべてを明らかにし、因果関係まで分析するというには解明の限界も考えられるが、明らかにできる範囲での分析という意味では、貴重な分析項目の提示であった。

2. 社会福祉人物史研究の史資料

前節では、社会福祉人物史研究における目的や意義、そして対象について整理してきた。本節では、社会福祉人物史研究において活用することができる史資料について整理する。

社会福祉の歴史研究に関する史資料論の参考となる著書として、2010年に社会事業史学会史資料問題委員会から出版された『社会福祉史・社会事業史研究のための史資料ガイドブック』がある。

社会福祉の歴史研究の史資料の対象範囲として、その種類を文書と文書以外に区分している。文書史資料の種類としては、「社会福祉・社会事業の活動にかかわって、関係行政体・施設・団体・個人などが収受・作成した文書類、帳簿や記録類、諸刊行物等」²⁰を挙げている。次に文書以外の史資料の種類としては、「映像・音声・(写真)・建造物・機械・器具等(利用者・従事者の作成

²⁰ 社会事業史学会史資料問題委員会編(2010)『社会福祉史・社会事業史研究のための史資料ガイドブック』、159頁。

した作品・物品など含む)、いわゆる（聞き取り）記録など」²¹が挙げられている。

そして、これらの史資料の種類はさらに、一次史料と二次資料に区分される。一次史料とは、「歴史の当事者や関係者がその時代の仕事や活動としての実践（事業）を遂行するために残した、ほとんど加工されていない生の史料や、その周辺の少し加工された関係史料」²²を指す。次に、二次資料は「後世になって歴史研究等としてまとめられた論文などや、当時の雑誌等に報告された（報告書）類で、これらはいずれも執筆者自身がある種の意図（目的）を持って、前者（一次史料）の史料等を加工し、さらにそれを解釈してまとめたもの」²³として定義される。

上記に挙げた文書史資料のうち、一次史料の種類と内容としては具体的に、①創立者等の日誌類、②施設の業務日誌類、③院児関係文書類、④寄付金集関係文書類、⑤会計関係文書類、⑥庶務関係文書類、⑦機関紙・年報等関係文書類、⑧その他文書類、⑨各種書簡類、⑩各種写真類、⑪各種図面類、⑫各種器具・教具類他、⑬関係者の所蔵文書類、⑭関係者の聞き取り資料類、⑮各施設の行政報告文書類、⑯地域環境・敷地建物類、⑰その他関連資料類、といったものが挙げられる。

対して、二次資料の種類と内容としては、①研究者他の人物史研究著書論文類、②研究者他の施設史研究著書論文類、③各施設の記念誌類、④関係者の各種雑誌への報告文書類、⑤各施設所在地の地元（新聞）等の記事類、⑥各施設所在地の都道府県史・区市町村史等の論文資料類などが挙げられる。

これらの史資料の種類と内容は、社会福祉の歴史研究で活用されることが多いが、社会福祉人物史研究においてもその活用において変わりはない。

3. 社会福祉人物史研究の視点に関する議論—社会福祉従事者論からの視点—

社会福祉人物史研究における視点や立場は、必ずしも社会福祉従事者論からのみとは言えない。それは、社会福祉の思想を系統的に明らかにする社会福祉

²¹ 社会事業史学会史資料問題委員会編（2010）『社会福祉史・社会事業史研究のための史資料ガイドブック』、159頁。

²² 同上、菊池義昭（2010）「社会福祉実践史研究における史資料の収集と活用方法」、122頁。

²³ 同上、122頁。

思想史研究の中で、人物思想という視点からの人物史研究もあれば、個別および複数の社会福祉施設の歴史をとりあげる社会福祉施設史研究の中で、施設創設者の経営思想といった視点からの人物史研究など、従来の人物史研究として散見されるからである。他の研究方法論からの人物史研究については今後の研究課題となるが、ここでは社会福祉従事者論からの視点を言及している吉田久一と田代国次郎の視点を整理検討する。

たとえば吉田久一は、社会福祉従事者の視点で人物史研究の描き方を記述している。「社会事業の人物叙述する場合、叙述者自身の社会事業従事者像がとられる」とし、研究者自身の従事者像とは何かという問いを含め、研究者自身が当時の開拓者たちの生活や文化、信条等をどこまで追体験ができるかについて、「主体との関係でいま一つの問題は、執筆者がどこまでこの開拓者たちに肉迫が可能かということである。特定の信条をもつ執筆者を除き、ここにあげられた多くの人は信仰なり、倫理なりの内面的課題を保持しており、それへの追体験を欠くことができないが、その追体験は容易なことではないであろう。しかも大正、いわんや明治人の思考方法や生活態度、あるいは人生への処し方は、すでに現代人にとって異質なものともなっている」²⁴と指摘している。

また吉田は、対象人物の従事者の内面的部分にも触れている。「社会事業であれば、必ず対象者（この用語には多少問題が残るが）とのかかわりあいのなかで、従事者が成長するわけであるし、それによって社会的視点の保有も可能になるわけである」²⁵となんらかの福祉ニーズを抱えた対象者とのかかわりあいによる従事者の成長の点について、また、「いったい社会事業史に現れる人物には、本当に対象者に対して差別感を持たなかったのか」と問題意識を問い、「それを考えることが、社会的矛盾や内面的矛盾の中で自己形成を行わなければならない社会事業人物史の重要な視点であろう」²⁶と説いている。本来、社会福祉従事者は、社会福祉ニーズを抱える利用者（対象者、クライアント）といった方々へ差別や偏見を持たず、ノーマライゼーションやインクルージョンといった理念のもとで援助技術を学ぶ教育が主流となってきたなかで、

²⁴ 吉田久一（1984）「巻頭言 人物史について」『社会事業史研究』第12号、社会事業史研究会、はしがき頁。

²⁵ 同上、はしがき頁。

²⁶ 同上、はしがき頁。

「社会福祉従事者は、本当に利用者に全く差別偏見を持っていないといえるか」という矛盾や本音に素直に向き合うことの意味に気づかせてくれる視点であろう。

続けて、内面的矛盾として時代的影響における従事者の姿勢についても挙げている。「いま一つは人物が歴史の経過のなかで、たとえば極限状況のなかで、どの時点まで対象をかかえていったか、あるいは逆に日常生活において彼女が仕事を始めた動機がどこまで持続できたかという点である」とあり、社会福祉（社会事業）にどこまで従事できたかをいう中で、「極限状況は別の言葉でいえば「緊張」状況であるが、特に日本近代社会のような戦争の連続の中に顕著に現れてくる対象者との関係が、従事者の戦争協力のきめ手の一つになる」²⁷とし、戦争という福祉とは相反する状況に時代が陥ることに従事者が時代に流されていかなかったのか、時代に背いて目の前の困っている人々にどこまで関わられてこられたのかという問題意識は、人物史の視点における、「社会と個人」という相関関係のもとでの従事者の内面的動機の変遷を映し出す。

社会福祉人物史研究の対象論について、無名の社会福祉人物の重要性を説いた田代国次郎の視点としては、戦争が続いた戦前の時代から、戦争が終わった戦後にかけて社会福祉に従事してきた従事者の戦争責任や人権への向き合い方について捉えている。「戦前、戦後にまたがって社会事業界、社会福祉界で仕事をするということは、その戦争責任をどう考え、どう戦後の新しい社会福祉原則となった権利、人権としての社会福祉原則、とりわけ中心となる実践原則である反戦、反核、平和的生存権獲得・実現の実践運動にどう具体化され、社会福祉理論と思想になったかという根本的問題と向きあうことになる」²⁸とし、戦前、戦後という社会福祉の歴史の連続性について、社会福祉従事者の戦争協力、そして終戦後からの戦争責任や人権としての社会福祉への向き合い方について人物史研究の視点に求めている。

吉田の視点は、社会福祉従事者の成長的、発展的な指摘が多かった一方、田代の視点は戦前から戦後という時代背景にかけての社会福祉従事者の姿勢につ

²⁷ 吉田久一（1984）「巻頭言 人物史について」『社会事業史研究』第12号、社会事業史研究会、はしがき頁。

²⁸ 田代国次郎（2009）『近現代社会福祉人物小史』、社会福祉研究センター、59頁。

いての指摘が多い印象を受ける。だが、社会福祉従事者論の視点からの人物史研究の視点については、吉田と田代の視点からさらに幅広い研究者からの視点も議論の広がりをもたせざるため、今後社会福祉人物史研究の社会福祉従事者論に関する視点についてはさらに多くの研究者から学ぶ必要がある。

4. 社会福祉人物史研究の今後の展望に関する議論

本稿における社会福祉人物史研究の今後の展望に関して、社会福祉における従事者論の立場から、今後の社会福祉人物史研究の方法論を深められる可能性がある。以下では、田代の構想である社会福祉従事者論からの展望として、無名の社会福祉人物の発掘と調査、そして社会福祉従事者全員を対象とした専門職人物史研究の構想について最後に考察する。

(1) 無名の社会福祉人物の発掘と継承

社会福祉従事者論からの展望として、晩年の田代国次郎の人物史研究に関する構想は、その発展性に強く言及している。

田代は、日本におけるこれまでの社会福祉人物史研究への評価として、「とくに、どちらかという一握の有名人物を研究対象にした取り組みが多く、エリート伝記史、有名人伝記史に傾斜してきたことを深く反省させられる」²⁹と述べ、一部の有名人物の伝記的紹介に偏った社会福祉人物史の研究が展開されてきたことを突いている。

その反省と発展の意味も込めて、次のように田代は提唱している。「むしろ、地方の草の根で活躍した、すなわち中央や有力な派閥からも評価されず、しかし、ひたすら社会福祉権支援にかかわった人物は多く、そうした人々を発掘していく必要がある」³⁰と、地方における社会福祉人物史に着目し、有名人に関わらず、社会福祉という権利の獲得のために尽力した人物の発掘に必要性を感じている。

また、日常の社会福祉権の支援と地域の社会福祉文化遺産の積算との関係については、「とくに、日常の社会福祉権支援に必要なのは、地域の社会福祉文

²⁹ 田代国次郎 (2007) 『地域社会福祉史入門』、社会福祉研究センター、38頁。

³⁰ 同上、38頁。

化遺産を積み重ねていくことであり、それを創造していった人々の先駆的实践は、きわめて重要であるし、検討、継承が強く望まれる」³¹と、人物による先駆的实践への意味づけを示唆している。

社会福祉の实践を担ってきた者の歴史は、必ずしもいつの時代も専門職という役割のもとでの实践を行ってきたわけではない。それ以前に、専門職としてのシステムが整わなかった時代からの社会福祉の实践にも注目し、田代は、「すでにその為に、長年にわたって社会福祉分野で、専門職としては認められなかったが、ながい实践遺産があり、それを支えた「人」が多くいる。そして、そうした先達がのこした貴重な实践遺産から学び、検討を加え、科学化し、必要な内容を継承していく取り組みが大切である」³²と、専門職であるかどうかではなく、社会福祉实践を支えてきた人々の实践の科学化という形での継承を目指そうとしていることがわかる。

(2) 「社会福祉専門職人物史」という構想

そして、そういった専門職に限らない社会福祉实践を支えてきた人物への対象から、最終的には社会福祉分野における全従事者へとその対象の広がり の展望を示していることが、晩年の田代の人物史研究構想の特徴の一つとして目を見張るものがあった。「本来ならこれら約328万人余（当時）が全部が社会福祉人物であり、それを各地方別にでも社会福祉分野ごと、その専門職養成プロセスから、就労条件、業務内容、待遇、諸手当、身体的疲労、ストレス、病気、研修、休暇保障等々に関して研究し、貴重な専門職人物史として記録していく作業をしなくてはならない。日本の場合そうした専門職として活躍した人物の社会福祉人物史がほとんど存在していない」³³とし、その分析対象は、専門職養成プロセスといった教育歴の面から休暇保障などの福利厚生面までも対象としている詳細な人物分析を構想していたのであった。またこれらの幅広い対象の分析調査を収集して記録し、一つの社会福祉専門職人物史といった新たな境地を示したのであった。

³¹ 田代国次郎（2007）『地域社会福祉史入門』、社会福祉研究センター、38頁。

³² 同上、38頁。

³³ 田代国次郎（2009）『近現代社会福祉人物小史』、社会福祉研究センター、49頁。

だが、現実的に一人の従事者からここまでのデータを収集することで、膨大な情報量になることは必須であろう。本書においては、田代はこれらのデータをどのように実践の科学化に繋げていくかという点までは論述が見られなかったため、今後の専門職人物史研究における課題の一つと考えられる。

おわりに

本稿では、日本における従来の社会福祉人物史研究の視点や方法について整理し、また社会福祉人物史研究の今後の展望について整理考察してきた。

だが、本稿は研究途上の研究ノートであるため、今後さらなる社会福祉人物史研究方法論の再定位に向け、その視点や方法の体系化について努めることは次回の課題となった。今後、社会福祉人物史研究が、社会福祉学における歴史研究の発展への寄与、さらには社会福祉学の研究水準の向上として位置づけられるよう、一層の研究の深化を追究していく所存である。

参考文献・資料

1. E.H. カー著、清水幾多郎訳（1995）『歴史とは何か』、岩波新書。
2. 小川信雄（2016）「近現代史における個人史研究の射程」に関するメモのノート」『人文社会科 3. 学研究科研究プロジェクト報告書』第296集、千葉大学大学院人文社会科学研究所。
4. 阿部洋（1960）『提案 I（4シンポジウム「人物研究の課題と方法」、II教育史学会第三回大会記録）』、日本教育史学会。
5. 大友昌子（2013）「歴史研究という方法論－社会福祉研究におけるその有効性と可能性－（特 6. 6. 集：社会福祉研究の軌跡）『社会福祉』第54号、日本女子大学。
7. 吉田久一・一番ヶ瀬康子・小倉襄二・柴田善守（1971）『人物でつづる近代社会事業の歩み』、全国社会福祉協議会。
8. 田代国次郎（2007）『地域社会福祉史入門』、社会福祉研究センター。
9. 田代国次郎（2009）『近現代社会福祉人物小史』、社会福祉研究センター。
10. 朴光駿（2011）『社会福祉の思想と歴史 魔女裁判から福祉国家の選択まで』、ミネルヴァ書房。

11. 金子光一（2009）『社会福祉のあゆみ』、有斐閣。
12. 金子光一（2009）「社会福祉の歴史を学ぶこと—『社会福祉発達史キーワード』を刊行して—」『書齋の窓』No.588、有斐閣。
13. 金子光一（2012）「海外史研究の到達点と展望—研究の視点と枠組みを中心に—」『社会事業史研究』第42号。
14. 五味百合子（1988）『社会事業に生きた女性たち』、ドメス出版。
15. 社会事業史学会史資料問題委員会編（2010）『社会福祉史・社会事業史研究のための史資料ガイドブック』、第一資料印刷株式会社。
16. 長谷川匡俊（1993）「巻頭言 人物史研究の課題」『社会事業史研究』第21号、社会事業史研究会。
17. 室田保夫（2010）「社会福祉思想史の醍醐味—大会の趣旨をめぐって—」『社会事業史研究』第38号、社会事業史学会。
18. 吉田久一（1984）「巻頭言 人物史について」『社会事業史研究』第12号、社会事業史研究会。
19. 吉田久一（2004）『新・日本社会事業の歴史』、勁草書房。